

〔特集〕

自動車メーカーのエンジニアが考える「働・学・研」協同

——定年退職を目前に控えての感慨——

片 山 勝 己

マツダ株式会社

要 旨

工業高専卒の私は、39歳の時会社のリストラ計画をきっかけに、社会人学生となった。その学びにより、機械工学以外の社会科学という自分の新たな可能性に気づき学びを進め修士号を得た。しかし、修士論文の内容・出来に満足できない私は、修士号取得後、色々な学会・研究会をさまよい歩いた。色々な大学教員の方と出会った。その過程で十名先生とも出会った。十名先生との出会いはまさに響き合いだった。まだお会いしていない、電子メールだけでやり取りをしている段階から、私にチャンスを与えてくださり、自分の新たな可能性に気づかせていただいた。

小論前半では前段の経緯、出会い・響き合いを整理した上で、私が社会人学生として得た「自分の知らない自分との出会い」について述べた。そして、後半では社会人学生としての今後の夢と自戒を述べ、さらにT型、 π 人間論から私自身が考案した新概念であるアーチ型人間について論じた。

キーワード：社会人学生、修士号（社会科学）、学会・研究会活動、出会い・響き合い、アーチ型人間

My understanding of learning and studying while working as a process engineer at an automotive company;

—— Impressions on my retirement at age 60 ——

Katsumi KATAYAMA

Mazda Motor Corporation

1 はじめに

私は十名直喜先生を一番の恩師と慕っている。先生が提唱されている「**働・学・研**」協同とお考えに深く共鳴し、求道・実践中である。だが、名古屋学院大学の院生ではない。

2015年に名古屋大学で開催された研究会で十名先生とお会いしたことをきっかけに、十名先生の院生ゼミ（産業システム研究会）に学外から何度か参加させていただいた。そのご縁で、2016年の基礎経済科学研究所・春季研究交流集会で研究発表をした。発表タイトルは「企業内学校の現状と転換課題—看護学校をモデルとした企業附属学校化提案」。私が一番取り組みたい、ライフワーク的な研究テーマである。

十名先生からは「名学大退職後も君を指導してあげるよ。メールでやり取りできるし、自宅まで来てもいいよ。企業内学校研究を学術論文にまとめなさい。本当なら君は博士号を目指すべきだ。発想力だけは既にその域にある」と言っていた。とても嬉しい。

でも、どうして私は十名先生をこのように慕っているのだろうか？決して面談の機会が頻繁でない十名先生と、なぜこのようにも響き合っているのだろうか？多分、そんな十名先生と私の関係性の中に社会人が実務と併行しながら大学・大学院で学ぶ意義、「**働・学・研**」協同の真の意味があるのかもしれない。これらの疑問に自問自答¹⁾したく、小論に取り組んでいる。

2 私と大学・大学院との出会い

本号に投稿させていただくにあたり、自己紹介をしておきたい。そこで本章では39歳で社会人学生として放送大学で学び始めた2000年から、2012年に修士号を得るまでの経緯を述

べることから始める。

2.1 私が社会人大学生となったきっかけ

20歳で工業高専の機械工学科を卒業し、広島にある自動車メーカー、マツダ^株（当時社名：東洋工業）に入社した。同社で約20年間勤務し、エンジニア（パワートレイン系工程設計者）としてある程度の仕事はできるようになったが、悶々としていた。高専時代に一般教養として学んだ社会科学への憧れを捨てきれなかったからである。これからもエンジニアとして生きて行っていのだろうか？自分には社会科学系の何か大きな可能性があるのではないだろうか？…と日々悩んでいた。

マツダはそのころ2001年2月に30歳以上の間接部門社員を対象に早期退職優遇制度を持ち出した。当時39歳の私にもびっくりするような退職金を提示され、早期退職を促された。いわゆるリストラである。その影響を受け当時の私は「会社にリストラされる前に自分をリストラするんだ。まずは大卒資格だ。大卒資格があれば、マツダに残るにせよ、離れるにせよ家族を守る力がつくはずだ」と考えた。

選んだのはテレビ・ラジオを用いた通信制で、広島にも学習センターがある教養学部^{のみの単科大学}、放送大学²⁾だった。3年次編入をした。専攻は「産業と技術」、学習テーマは会社での仕事に即活かせるようにと、産業論・経営工学を選んだ。

2.2 大学での学習の拡大、やがて研究への推移

放送大学での学習は、実に刺激的だった。自分にも合っていた。出勤前の数時間、早朝に起きて録画した放送授業（テレビ番組）を見ればいい。分からない所があれば、再生を一時停止

し、本やWebで調べればいい。朝食の時間になれば、授業途中でも再生を止め、続きは翌日以降に学べる。通学の必要が殆どなく、移動時間ロスが極めて少ない。

入学時の授業料が卒業時まで保証される最後の学生だったこともあり、産業論・経営工学系の放送大学の殆ど全ての授業を学び終えた後、興味・関心のある他専攻の授業も受けるようになった。30歳でインドネシア製造子会社に向向していた際、教育担当を兼務していたことから教育学を、また当時流行していた心理学をそれぞれ学び加えた。多く安く学びたい…と意図的に卒業を遅らせるため、卒業要件とならない科目を履修することとした。

しかし、3年次編入生の在籍期間は6年だ。いつまでも意図的に卒業を遅らすこともできない。単に学ぶことにも飽きてきた。そこで、ぼんやりとこれからは研究に取り組みたい…と思いつつも研究テーマが定まらず、一旦卒業研究未履修のまま「産業と技術」専攻を2005年9月に卒業した。そして、卒業後即、放送大学の別専攻「発達と教育」に再入学した。再入学後、当時の広島学習センターの所長であった小笠原道雄先生（教育哲学）と何度も相談し、研究テーマを「製造業企業で働く、技能者・技術者の職業能力向上策に関する何か」に定めるまでに至った。

そしてやっと、2009年4月からの学部卒業研究を皮切りに研究を始め、卒研修了後に即、放送大学の大学院に進学することにした。研究指導は一方通行のテレビではできない。放送大学でも面談での研究指導が基本だ³⁾。そこで、学部卒研と大学院での修士論文執筆のため、ほぼ毎月関東地区に研究指導を受けに行く時期が3年間続いた。

卒研では「日本国内製造業における企業内学

校の意義と特徴」と題して「発達と教育」の学生として「産業と技術」の教員（人的資源管理論）の指導を受けた。大学院修士課程（社会経営科学プログラム）では、卒研の発展研究として企業内学校の今後の転換課題を約1年半研究した。しかし、修士論文提出3ヶ月前に教員（農業経済学）から「このレベルでは修論とは認められない」との指導を受け、それを全て捨て類似事例の一つとして取材していたホンダの整備士養成学校を取り合上げ「学校法人ホンダ学園の特徴と強み」との題目で、特定事例研究的な修士論文を書き、辛くもC評価⁴⁾で修士号を得た。2012年3月のことだ。

3 修士号取得後の彷徨

～色々な学会・研究会への参加

修論は、本当に書きたい企業内学校のことでなかった。そのこともあり、次に何をしようか、本当に自分のしたいことは何でそれがどこでできるのかを知りたく色々な所をさまよい歩いていた。

修士号取得後半年の2012年9月には日本自動車工業会が主催する次世代育成プログラムである学生フォーミュラーに行った。トヨタ、ホンダ、日産、スズキ、ヤマハ…、自動車メーカーの企業博物館は殆ど全て行った。

関連する学会や研究会にも「来てもいいよ」と言われる所からドンドンと巡り回った。その過程でお会いしたのが十名先生である。十名先生と出会う迄の私の学会・研究会探訪を時系列的に箇条書きすると下記ようになる。

- ①. 修士1年の時、高専学会で口頭発表した（2010年8月、長岡技術科学大学）
- ②. ①で技術教育研究会にも所属されている吉田喜一先生と知り合う

- ③. 吉田先生のお人柄に惹かれ、技術教育研究会に行く（2012年8月、和歌山）
- ④. ③で東京学芸大学の坂口謙一先生に産業教育学会入会をお勧めいただく
- ⑤. 産業教育学会の大会に初めて参加する（2012年10月、金沢大学）
- ⑥. 産業教育学会でホンダ修論の概略発表をする（2013年10月、名古屋大学）
- ⑦. ⑥をきっかけに、産業教育学会の企業内教育部会に参加する（2014年3月）
- ⑧. ⑦で名古屋大学技術教育学研究室の横山悦生先生と知り合う
- ⑨. 横山先生から「ものづくりと技術教育研究会」にお誘いいただく（2015年2月）
- ⑩. ⑨で初めて十名直喜先生と出会う（2015年7月）
- ⑪. 十名先生の院生ゼミに初めて参加する（2015年9月）

3.1 産業教育学会での先生方との出会い

私は今、産業教育学会をメイン学会として活動している。前述の④～⑦がその経緯だ。⑥のホンダ修論の発表は、私にとって産業教育学会での初めての発表だったが、注目され会場が満員になった。マツダ社員がライバル会社のホンダのことを語ったからだと思う。質問もたくさんいただいた。それぞれ刺激的な質問だった。それをご縁に色々な先生方に可愛がっていただけるようになった。

⑥の大会の部会では企業内教育部会に参加した。その座長である大東文化大学の沼口博先生からは入会間もない私に、指定コメントャターをする機会をいただいた。マツダ労働組合取材会での私の事前準備と当日進行に着目していただいた名古屋産業大学の三宅章介先生とは、お互いの自宅を行き来し家族ぐるみでお付き合い

くださるほど可愛がっていただいている。

そして、同じ企業内教育部会の主要メンバーである名古屋大学教育学部技術教育学研究室の横山悦生先生からは、先生の研究室の院生合宿に年数回参加することをお許しいただいている。20代の中国人留学生（女性）が半数、私のような社会人学生（日本人、殆ど男性）が半数のゼミだ。若く優秀で伸び盛りの彼女たちと、私のような彼女たちの親世代の実務家が議論を交わす、とても刺激的なゼミだ。

3.2 私と十名直喜先生との出会い

⑧の横山先生は「ものづくりと技術教育研究会」を主催されている。年に数回主に名古屋大学で研究会が開かれている。十名先生もそのメンバーだ。この会は研究だけではなく、研究者同士の交流会も重視している。実務家の参加も多い。2015年6月6日の研究会で、次回研究会の関連書籍として『ひと・まち・ものづくりの経済学：現代産業論の新地平』が紹介され、希望者に無償提供された。私は早速いただいた。

一読するとその本はとても刺激的だった。これはしっかり予習しなければならない…と思い、私が自己開発し、KMRN（キムリン：Katayama style Mind-map-like Reading Note）と呼称している図表1のようなノートを書い

図表1 片山風読書ノート「KMRN」



た。それを同研究会のメーリングリストに投稿すると、早速十名先生から「曼荼羅的なまとめ方のノートだ。南方熊楠⁵⁾を想起させる」とお褒めのお返事をいただいた。そして、まだ1回も十名先生とはお会いしていないにも関わらず、同研究会の次回（2015年7月4日、題目:『地域創生の産業システム(2015, 十名直喜編著, 水曜社)』合評会)での十名先生の30分発表後、10分の指定コメントをする機会をいただいた。

私はその10分の最後に、本書に対する不満・疑問まで発表した。初学者である私発言に対しても、十名先生は実に丁寧にリプライされた。さらに、メーリングリストでのやり取りを経て、マトリックス的な整理にまで至った。

今考えても、実に刺激的でそしてたくさん学べた2週間であった。確かに私は十名先生と響き合っていた。そして、この出会いをきっかけに、私は十名先生の院生ゼミ（産業システム研究会）に学外参加者として参加させていただけるようになった。

4 私が社会人学生として、学部・大学院で得たもの

39歳で社会人学生として大学で学び始めてから得たものは何か。まずは思い当たるだけ、順不同、ブレインストーミング的にエクセルに入力してみた。得たもの以外に失ったもの、費やしたものの、さらには得なかったけど得られなかったものを殴り書きしてみた。こうしてできたのが図表2である。この表を作ることで確かに漠然とした思いが整理できた。視覚化できた。

その中で自分自身一番じっくりくる、納得できるのは、「働く喜び」を得たことだ。大学入学前からその喜びは持っていた。だが、それを大学での学びで強化できた。修士修了後3年

図表2 社会人学生として学部・大学院で得たもの・その他

No	分類①	分類②	もの
1	得たもの	有形	修士（学術）の学位
2		↑	学士（教養）の学位
3			「認定心理士」資格
4			学部の単位：224単位
5			修士課程の単位：33単位
6			学びの基本パターン修得・自己流儀確立
7			研究の基本パターン修得
8		↓	論理科学的な思考法
9		無形	学ぶ喜び・働く喜び
10	得たかったが、	得られなかったもの	高収入
11	得られなかったもの		会社の中での昇進・昇給
12	失ったもの、	費やしたもの	時間
13	費やしたもの		学費（含む交通費）

たった2015年2月15日に出身院ゼミにOBとして参加したことがある。その時、恩師河合明宣先生を含んだゼミ生みんなの前で「修士号を取ってから給料が上がったわけではありません。昇進もしていません。でも、物事の真理・本質がより見えるようになり、働くことが益々楽しく、喜びに思えるようになりました」と発表した。それを受けて河合先生から「よっしゃそうだ。それでいい。うん、今晚の君の懇親会会費は俺が出してやろう」と言われた。とても嬉しかった。

でもこれとて、私が社会人大学生として得た一番のものを十分表現していないと思う。もっと本質的かつ短文で言い表せる別表現がある。それは多分、「大学での学びで今まで自分が知らない自分に気づいたこと」だと思う。

大学に入り、勉強をし始めるとすぐに勉強が楽しくて仕方なくなった。大学で学んだことが仕事に即活かせたり、今までとは違った視点で

仕事を見直せるようになったりした。これは大きな喜びだった。そして、益々大学での学びにはまっていた。「リストラ対策としての学び」がいつの間にか、「学ぶことそのものが喜び」となっていた。学習テーマも産業論・経営工学から、経済学・経営学、さらには心理学・教育学へと広がっていった。

そして、ある時点から、工業高専卒としての「機械工学・工程設計」という第1の専門以外に、「工業を経営学の視点で見直してみる」との第2の専門ができた。近頃言われ始めたMOT(Management Of Technology: 技術経営)だ。さらに最近、名古屋大学教育学部技術教育学研究室的院生合宿に参加したり、産業教育学会や技術教育研究会、高専学会で活動したりしている。製造業で働く技能者・技術者の学び・職場での成長を究明・支援したいからである。「産業教育学」という第3の専門分野ができたのだと思う。

5 大学での学びで得たものを糧に私が今後したいこと

私は今、58歳で、平均余命は25年ある。マツダの定年は60歳で1年後だ。雇用延長したとしてもそれは65歳で、6年しかない。残された生産年齢人口期間6年半をどう活かすか、さらにその後、死ぬまでの約20年をどう生きるべきか、そろそろ考える年齢にある。いわゆる「終活」を真剣に考えなければならない年齢層になった。

以下、これらを、会社での仕事、子育て、研究の3つに分け、今自分が考えていることをまとめる。

5.1 会社での仕事

まず、仕事については今までの延長線で行きたい。放送大学で学んだがゆえにさらに楽しくなった仕事に邁進し続ける。

やりたいこと、成し遂げたい業務課題はとてたくさんある。それができそうな予感、支えてくれる上司や社内の仲間、さらにはそうした業務改善で双利共栄できる社外取引先もたくさんある。それらを学術的に促進・支援するため、今取り組んでいる工具マーケティング関連の卒業研究にも注力したい。

5.2 子育て

同居する4～8歳の孫の教育・子育てにも頑張りたい。この子たちが成人するまであと約15年だ。私が73歳になるまでだ。私は同年代の者より若い。ルックスも若ぶりだし、気も若い。夢も意欲もある。そして、何より健康だ。だから、子育てに頑張られる。

ルソーの『エミール』よろしく、ルソーが少年エミールを家庭教師として0歳から結婚するまで教育したと同様に、私は自分の孫を教育してみたい。これもワクワクする挑戦だ。

5.3 研究

そして、可能ならば修士号しか持たない私ではあるが、研究者の端くれと認められるような学術論文を残してから死にたい。楽しいから学ぶ、学び続ける…のは悪いことではない。でも、それだけではとても残念だ。学んだことを何らかの形で地域や社会、あわよくば世界に活かしたい。マツダでの実務経験…放送大学での学び…そして、これらを組み合わせで分かりかけた産業教育に関する何かをきちんとした学術論文にし、後世に伝えられるようにしてから死にたい。学会誌掲載の査読付き論文を5本書くこと

が当面の目標だ。

6 社会人大学生であり続ける 自分への自戒

私は多分、これから死ぬまで大学生だと思う。現所属大学である放送大学は科目選択の自由度が高く、幅広い教養が学べる。教養学部みの単科大学ではあるが、各コースの専門科目の専門性も意外に高い。学費が格安で長居ができる…との点も私にはとてもありがたい。

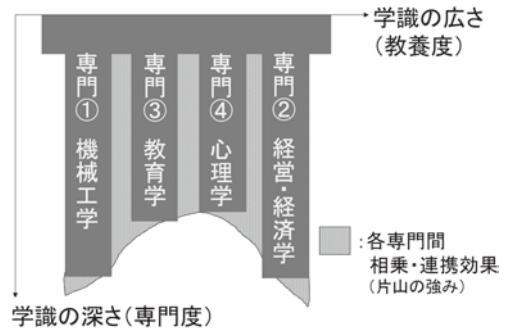
ただし、一つ自分を戒めたいことがある。それは生涯学習として大学で学ぶことそのものが目的化することだ。自分一人の楽しみのみを目的として学び続けること…は是非避けたい。語弊を恐れずに言えば、「退職者の余暇活動充実を主目的とした、自己満足的で消費的な学習」にはしたくない。たとえ、直接的に産業教育学的貢献・社会的便益の向上につながらなくても、誰かのモデルになる働きや後世の人が一目置いてくれるような価値ある学術論文につながるよう、努力を継続していきたい。

7 おわりに

～T型人間の進化形 π 型人間から、さらに進化したアーチ型人間の提案

私は工業高専卒だ。高専は実学・専門教育に特段注力している。一般教養が若干弱い点も否めない。高専卒は時に専門バカだと指摘されることもある⁶⁾。そうではなく、幅広い教養と、稼ぐ力を確保するための深い専門知識を兼ね備えた人、即ちT型人間であることが必要だ。さらに副専門をもうひとつ持った π 型人間が理想的だと言われている。私も π 型人間が好きだ。 π 型人間は一つの理想だと思う。

図表3 アーチ型人間



だが、ここでもうひとつ私のこれまでの経験を踏まえた新たな概念を提案したい。図表3のアーチ型人間だ。

私は工業高専で機械工学を専攻した。マツダでも機械系のエンジニア（工程設計者）として長年勤務してきた。だが、39歳で産業論・経営工学をテーマに放送大学で学び始めてから、第2専門的なもう一つの柱が立ち始めた。経営学・経済学を基盤としてマツダでの車づくりをMOTとして捉えるようになった。純粋な工程設計者ではなく、工程設計部門に属しながら、設計変更管理や工具調達業務といった、スタッフ的業務を担当するようになった。この時点で π 型人間になった。

そして、第1専門である機械工学と、第2専門である経営学・経済学との間に、それらを取り持ちかつ双方に強く関連している別の学問を副次的な専門とするようになった。第3専門である教育学、第4専門である心理学である。このようにして、私は π 型人間から髪をとく櫛のような櫛型人間になったと思う。

この状態を専門があまりに乱立した「器用貧乏」と指摘されるかもしれない。だがそうではなく、図表3のパターン部に示すような、各専門が相乗効果的に活かせる、新効果が生じるようにしたい。そして、それが私の新たな強みと

なり、大学教員等のプロの研究者とは違う、社会人研究者・実務併行型研究者としてユニークでプレミアムな効果を生じさせたい。アーチは橋だ。虹の懸け橋だ。私も虹の懸け橋のように、人と人、町と町、さらには企業や学会のような組織と組織をつなぐ仕事をしたい。

こうしたアーチ型人間への挑戦課題を私に与えてくれた、今まで私が出会った先生方に再度感謝する。本稿3章の①～⑪の流れは人と人のご縁、人脈の連鎖反応だ。また、3章特に、3章2節の十名先生との出会いは、まさに人と人との響き合い、コラボレーションの爆発的増殖だった。

このようにしていただいたご縁、出会いを大切に、私は死ぬまでに何か社会の役に立つ学術業績を残してから死にたい。そのことが十名先生に今までいただいたご恩に報いる、私なりの回答・お礼返しになると思うからだ。十名先生からは特に下記の宝をいただいた。

ア. 相手を尊重し、その個性・特長を見極めそれらの成長を支援すること。

イ. 読み手にコンテンツとしてのアの個人の個性・特長をよりよく伝えるために、論文の型・論述形式を揃えること。

前段の学術業績は博士論文とすべきだろう。定年退職を目前に控えた私である。でも、やっぱりこのまま死ぬのはもったいない。死ぬまでに最期のあがきをしてみたい。小論を書き、改めて思った次第である。

注

- 1) この自問自答が私のこれからの人生、特に研究に関する指針・方向性を明確化し、迷いを打ち切るいい機会になると考えている。
- 2) もし私が名古屋近辺に住んでおり、名学大や十

名先生が存在を知っていたら、間違いなく名学大に入学していたはずだ。

- 3) Web会議システムを用いた、放送大学大学院の修論ゼミも一部のゼミで実施されている。だがまだ十分一般的とは言えない。
- 4) この評価は屈辱的だと思っている。でもそれゆえに、修士修了後も研究を続けているのかもしれない。
- 5) みなかた くまぐす、1867-1941年博物学者、生物学者、民俗学者。言動や性格が奇抜で人並み外れたものであるため、後世に数々の逸話を残している。
- 6) 私（高専学会正会員）はこの指摘は的外れだと思っている。大学受験勉強に特化した普通科進学校の方が「大学受験」という専門に相当悪影響を受けていると思う。

主要業績

片山勝己 [2011]「高専の特性を活かしたより幅広い学校間連携への提案・企業内学校の失敗事例を教訓として」『日本高専学会誌（第5回論文特集号）』日本高専学会

片山勝己 [2012]「学校法人ホンダ学園の特徴と強み～同学園を媒体としたホンダグループの連携強化」放送大学大学院社会経営プログラム修士論文

参考文献

片山勝己 [2016]「私の学会での夢：工業高専卒の現役技術者、兼業アマチュア研究者として」（会員フォーラム）『産業教育学研究』日本産業教育学会

片山勝己 [2017]「高専に期待する教養教育について―工業高専卒編入生として通信制大学で「学士（教養）」を取得した経験から」『年会講演会講演論文集』日本高専学会